

## 玉葉集、風雅集に入集の建礼門院右京大夫の和歌をめぐって

戸 谷 精 三

第十四番目の勅撰集である玉葉集と第十七番目の勅撰集である風雅集が、京極派歌人の詠風を反映させた勅撰集であることはすでに多くの論考によって知られている。入集歌及び入集歌人についての論考、巻頭歌・巻軸歌についての論考も多く、玉葉集・風雅集に対する評価は決して低いものではない。

このような京極派歌人の詠風に関する論考の中にあつて、『建礼門院右京大夫集』とこれら京極派歌人の詠歌についての論考は早くから知られている。そして、京極派歌人の詠歌に『建礼門院右京大夫集』が少なからぬ影響を及ぼしていたことが論じられている。これら先学の御業績に支えられながら、小論においては、『建礼門院右京大夫集』にある和歌の歌句の中に、京極派歌人の愛誦句が窺える点について論じてみたい。

### 一

『建礼門院右京大夫集』は、「恋と追憶に情熱を捧げ尽した生命の証として作品集を遺すという発想」が「時代を越えて、自らの人生を大切に考える人々の共感をよび起」したこともあろうし、また、家集でありながら長い詞書のもとに和歌があるためか、歌日記の性格のもとに享受されたためか、家集の中にある和歌よりもその詞書をいかに享受し、勅撰集入集の際どのように反映させているのであろうかといった点に注意されている。服部喜美子氏の「建礼門院

右京大夫集」の本質と「玉葉・風雅集」(『語学・文学』愛知県立女子大学・同短期大学紀要、昭和36年12月)もこの方面から御論考を展開されている。服部氏は、建礼門院右京大夫の和歌の勅撰集における入集歌数の検討から、右京大夫の和歌が玉葉集と風雅集の二集においてはじめて大きく採り上げられたとされた。また、玉葉集・風雅集の二集への入集歌をその詞書とともに示されて、『建礼門院右京大夫集』の詞書の文章に記された詠歌の事情や場を理解し、『勅撰集の詞書としては可能な限りに詳しく、又要領よく説明している事を知るのである』とその享受の様子を示された。また、右京大夫の入集歌は「彼女の感動の最も高潮する場面」から採られていることについても言及され、この傾向は玉葉集において、鮮明であることも述べておられる。そして、ことばの繰り返しが見られるものは、風雅集に多いことも指摘されている。

一方、永福門院の詠歌の中に『建礼門院右京大夫集』の影響を認められている岩佐美代子氏は、具体的にいくつかの永福門院の詠歌を示されている。

みるまに山は消ゆくあま雲のかかりもらせるまきの一もと(玉葉 二一四四)

みるまに雲ははれゆく月かげも心にかかる人ゆえになを

(右京大夫集 一一二)

村雲にかくれあらはれ行月のはれもくもりも秋ぞかなしき

(風雅 五九四)

大空は晴れも曇りもさだめなき身をうきことはいつも変らじ

(右京大夫集 二五四)

いはばやと思ひしこともいくへだてへだつるはてはことのはもなし (風雅 一三三四)

いはばやと思ふことのみおほかるもさてむなくやついにはてなむ (右京大夫集 二〇六)

これらの永福門院の詠歌は、「右京大夫集の影響なくしてはおそらく生れぬ歌である」とされ、勅撰集入集歌の他に、永福門院百番御自歌合の卷末歌を呈示され、

手すさびにつくをく墨も行末は誰かあはれと水茎のあと

(百番右)

この詠歌が、右京大夫集の巻頭歌である

われならでたれかあはれとみづくきのあとし末の世に伝はらば

(右京大夫集 一)

と密接な関係にあることを述べておられる。

このように、京極派の歌人の中心的存在である永福門院の詠歌に見られる「建礼門院右京大夫集」の享受のあり方は、その詠歌の中に大きな影響をもたらしていると考えることができ。また、服部氏の御論考からも窺うことができるように、「建礼門院右京大夫集」の詞書は、京極派の勅撰集である玉葉集・風雅集の中で、「勅撰集の詞書としては可能な限りに詳しく」説明され、記されている。

このような御業績に支えられながら、建礼門院右京大夫の勅撰集入集歌の中から認められる京極派歌人グループの愛誦歌句について論じてみたい。

## 二

先ず、玉葉集・風雅集に入集した建礼門院右京大夫の和歌をとり

あげてみたい。

玉葉集入集歌

(1) ぬれそめし袖だにあるをおなじの露をばさのみいかがわくべき (恋 1559)

(2) 夕日うつる梢の色のしぐるるに心もやがてかきくらすかな (恋 1660)

(3) げにもその心のほどや見えくらん夢にもつらきけしきなりつる (恋 1759)

(4) 物おもへば心の春もしらぬ身になにうぐひすのつげにきつらん (雑 1842)

(5) あらずなるうき世のはてに時鳥いかでなくねのかはらざるらん (雑 1926)

(6) 月をこそながめなれしか星の夜のふかきあはれをこよひしりぬる (雑 2159)

(7) いかにせんわが後の世はさても猶むかしのけふをとふ人もがな (雑 2353)

(8) うき事のいつもそふ身はなにとしもおもひあへでも涙おちけり (雑 2354)

(9) 恋ひしのぶ人にあふみの海ならばあらし波にもたままじらまし (雑 2466)

(10) いづくにていかなることを思ひつつこよひの月に袖しほるらん (雑 2498)

風雅集入集歌

(11) 風をいとふ花のあたりはいかがとてよそながらこそおもひやり  
つれ (春 183)

(12) しめのほかも花としいはん花はみな神にまかせてちらさずもが  
な (雑 1462)

(13) 今や夢むかしやゆめとたどられていかに思へどうつとぞなき  
(雑 1915)

(14) かなしくもかかるうきめをみくまののうらわの浪に身をしづめ  
ける (雑 2006)

(15) おなじ世となほおもふこそかなしけれあるがあるにもあらぬこ  
の世を (雑 2007)

(16) うつしうるやどのあるじもこの花も友に老いせぬ秋ぞかさね  
ん (賀 2185)

これら十六首の玉葉集・風雅集入集歌について検討してみたい。

先にも述べたように建礼門院右京大夫の和歌と、京極派歌人の中  
でも中心的な存在である永福門院の和歌については、岩佐美代子氏  
の御指摘があり、『建礼門院右京大夫集』の詞書の文章をいかに要  
領よく玉葉集・風雅集の詞書として説明しているかについては、服  
部喜美子氏の御指摘がある。小論はこのような御指摘、御高説に支  
えられながら、京極派の歌人集団に愛誦された歌句について稿を進  
めてみたいと思う。

玉葉集・風雅集に入集した十六首の和歌についての検討を歌句の  
面から進めてみたい。以前拙稿<sup>(註2)</sup>において試みたように、風雅集まで  
の勅撰集の中で、歌句の用例が玉葉集・風雅集に顕著であり、他の  
勅撰集における用例がない場合、もしくは一例程度のものについて  
調べてみると、そこに京極派歌人たちの愛誦句と考えられるものが  
いくつか見出し出せる。検討した歌句についてみることにしたい。

(2)の歌から「ゆうひうつる」

夕日うつる柳のすゑの秋かぜにそなたの雁の声のさびしき

(風雅 為兼 秋 542)

夕日うつるそものもりのうすもみちさびしき色に秋ぞくれゆく

(風雅 光明院 秋 689)

「こずゑのいろ」

むらむらに梢の色もうつろひて夕日の山に雲ぞしぐるる

(玉葉 藤原為理 秋 798)

しぐるべき梢の色はつれなくて花をやとぎの物とながめん

(玉葉 後伏見院 雑 2026)

(7)の歌から「むかしのけふを」

時鳥こととふからにいとどしくむかしのけふをこひつつぞなく

(玉葉 大藏卿行宗 雑 2408)

(9)の歌から「こひしのぶ」

恋ひしのびさのみしたはで今はただわれもわするる心ともがな

(玉葉 前参議家親 恋 1717)

いきて世にありとばかりはきかるとも恋忍ぶとはたれかつたへむ

(玉葉 伏見院 恋 1798)

われのみぞもとの身にして恋ひしのぶみし面かげはあらぬよの月

(玉葉 従三位為子 雑 1982)

(10)の歌から「いかなることを」

まして人いかなる事をおもふらんしぐれだにしろけふのあはれを

(玉葉 出羽弁 雑 2329)

ここにとりあげた「ゆうひうつる」・「こずゑのいろ」・「むかしの

けふを」・「こひしのぶ」・「いかなることを」は、どれも勅撰集にお

ける歌句の用例が、玉葉集・風雅集において顕著な歌句である。そ

して、特に「ゆうひうつる」・「こずゑのいろ」・「いかなることを」といった歌句は、勅撰集における用例が玉葉集において初出のものである。<sup>(金)</sup>また、「こひしのぶ」は新後撰集に法眼行済の詠歌

恋ひしのぶむかしの秋の月かげをこけのたもとのなみだにぞみる  
(1541)

が、先行例で一例認められるのみである。勅撰集においてこの歌句が複数認められるものは玉葉集のみである。また、勅撰集における用例は、新後撰集と玉葉集に限られる。

また、「むかしのけふを」については、新勅撰集に三条右大臣の詠歌

をみなへしをる手にかかるしらつゆはむかしのけふにあらぬなみ  
だか(243)

が、先行例で一例認められるのみである。そして、先に述べた歌句「こひしのぶ」の場合と同様に、勅撰集において「むかしのけふを」が複数認められるものは玉葉集のみである。また、勅撰集における用例は、新勅撰集と玉葉集に限られる歌句である。

このようにして検討したところ、「ゆうひうつる」・「こずゑのいろ」・「むかしのけふを」・「こひしのぶ」・「いかなることを」といった歌句は、京極派の趣向に合った歌句と考えることができる。

そして、これらの京極派の趣向に合った歌句の詠まれた建礼門院右京大夫の和歌について検討を続けてみると、そこには、ただ単に京極派の歌人たちによって愛誦された歌句というだけではなく、『建礼門院右京大夫集』という作品を京極派の歌人たちがどのように享受していたのかを知ることができるように思われる。

### 三

前項において述べたように、建礼門院右京大夫の詠歌から、京極派の歌人たちに愛誦された歌句をいくつか知ることができた。そして、これらの愛誦歌句とその愛誦歌句を有する建礼門院右京大夫の詠歌について吟味すると、そこには京極派歌人たちの享受のあり方を窺うことができるように思われる。

それは、複数の京極派歌人によって愛誦句として採り上げられた歌句を有する前掲の(2)と(9)の建礼門院右京大夫の和歌である。

(2)の和歌においては、「ゆうひうつる」と「こずゑのいろ」が、(9)の歌については、「こひしのぶ」が京極派歌人の愛誦した歌句となっている。「ゆうひうつる」・「こずゑのいろ」ともに勅撰集においては、初出歌句である。「こひしのぶ」は、先にも述べたように新後撰集に法眼行済の詠歌が既にあり、勅撰集における初出歌句ということはできないが、為子・家親・伏見院といった京極派の歌人たちによって共有・愛誦されている。

そしてさらに、これらの「ゆうひうつる」・「こずゑのいろ」・「こひしのぶ」といった歌句を有する建礼門院右京大夫の和歌はもとより、これらの歌句を有する京極派歌人たちの詠歌もすべて勅撰集に入集しているということである。何ゆえにこれほどまでに京極派歌人たちはこの建礼門院右京大夫の和歌二首に執心するのであろうか。この二首が特別京極派歌人たちに印象が鮮明であったのであろうか。京極派の歌人たちにとって何か特別な意味をもつ詠歌であったのであろうか。『建礼門院右京大夫集』の中でのこの二首のあり方を検討してみたい。

先ず『建礼門院右京大夫集』の中にあるこの二首の和歌を、その

詞書とともに見ることにしたい。<sup>(註14)</sup>

なにとなく見聞くことに心うちやりて過ぐしつ、なべての人のやうにはあらじと思ひしを、あさゆふ、女どちのやうにまじりゐて、みかはす人あまたありし中に、とりわきてとかくいひしをあるまじきことやと、人のことを見聞きても思ひしかど、契りとかやはのがれがたくて、思ひのほかに物思はしきことそひて、さまたま思ひみだれし頃、里にてはるかに西の方をながめるや、こずゑは夕日のいろしづみてあはれなるに、またかきくらししくるを見るにも、

夕日うつるこずゑの色のしぐるるに心もやがてかきくらすかな

海のおもては、深みどりくろくろと、おそろしげに荒れたるに、ほどなき見渡しのみかひに、うるはしき舟路にて、空はあなたの端にひとつにて、雲路に漕ぎ消ゆる小舟の、よそめに波風の荒く、なつかしからぬけしきにて、木草もなき浜辺に、たへがたく風は強きに、いかにぞ、波に入りにし人の、かかるわたりにあると思ひのほかに聞きたらば、いかに住み憂きわたりなりとも、とどまりこそせめなどさへ案ぜられて、

恋ひしのぶ人にあふみの海ならば荒き波にもたちまじらまし

これらの和歌が、資盛と繋がり深いものであることがその詞書から自ずと窺うことができる。そして、この二首は『建礼門院右京大夫集』の中にあつて、重要な場面でのものであることが指摘できる。「なにとなく見聞くことに」の詞書によって始まる場面については、「初めて語られる、資盛との恋の芽生えについての回想である<sup>(註15)</sup>」とされたり、「平資盛との交渉が始まったことが知られる<sup>(註16)</sup>」と

指摘されるところである。そして、「なにとなく忘れがたくおぼゆることども」を書き連ねる家集に、最初宮中での華やかな回想を配置した作者は、このあたりから、資盛との、悩み多く、やがて悲劇に終る恋の追憶の中に身を浸す叙述を、展開しはじめる<sup>(註17)</sup>。と述べられたりすることからも窺えるように建礼門院右京大夫と平資盛の恋愛を語る時、決して避けて通ることのできない場面である。この場面での建礼門院右京大夫の詠歌を勅撰集である玉葉集に入集させ、さらにその詠歌の中の歌句を愛誦歌句として共有し、自らの詠歌にとり入れ、その詠歌を玉葉集に入集させている京極派歌人たちの『建礼門院右京大夫集』に対する執心ぶりを窺うことができる。

また、入水した資盛のことを想起した時、「悲しい思い出を振り捨てるように、比叡の坂本に旅立つが、琵琶湖に立ちつくして<sup>(註18)</sup>」詠んだ「恋ひしのぶ人にあふみの海ならば荒き波にもたちまじらまし」が、資盛を回想する場面においてとりわけ悲しみを誘っていたことであろう。いくつかある回想場面での詠歌の中から、この和歌をとりあげた京極派歌人たちは、この歌の歌句の中から愛誦歌句を生み出し、共有し享受している。「為兼歌風の真髓を体得し、京極派の代表歌人となられた<sup>(註19)</sup>」伏見院においても言及できることである。こうしてみると、京極派歌人たちの『建礼門院右京大夫集』に対する評価が並々ならぬものであることが窺え、その享受のあり方を知ることが出来る。玉葉集に入集した建礼門院右京大夫の和歌が「家集において彼女の感動の最も高潮する場面、即資盛との恋愛による苦悩資盛の都落に關しての歎き、又彼の遂に果てたことを知つてからの悲歎、その後の長い生活においてただ一筋に彼を偲び彼の後世をとぶらう追慕の作<sup>(註20)</sup>」を採り上げているとされた服部喜美子氏は、家集の詞書が勅撰集に可能な限り詳しく記されているとされ、

玉葉集が「はじめて右京大夫の歌をそのあるべき姿のままにとらえ、その直情の美しさを認めて数多くとりあげた」と、入集歌の詞書を中心にして述べておられる。

さらに、入集歌及びその歌句について検討してみると、京極派の歌人たちは、建礼門院右京大夫の和歌を享受し、その和歌の中の歌句を愛誦歌句として採り上げ、共有していた。そして、さらに京極派の歌人たちは、建礼門院右京大夫の和歌とその和歌の中にある愛誦歌句をとり込んだ京極派歌人の和歌を高く評価し、京極派の勅撰集である玉葉集・風雅集に入集させている。

このように「建礼門院右京大夫集」は、「京極派歌人に非常に好まれ、その独特な表現の形成にあずかって力のある集」と考えることができる。

## 註

- 1・2 糸賀きみ江氏『建礼門院右京大夫集』（『新潮日本古典集成』新潮社）
- 3 「建礼門院右京大夫集」の本質と「玉葉・風雅集」（『語学・文学』愛知県立女子大学・同短期大学紀要、昭和36年12月）
- 4 前掲論文註3
- 5 岩佐美代子氏「京極派歌人の研究」（笠間書院）
- 6 玉葉集・風雅集については、旧国歌大観を、建礼門院右京大夫集については、日本古典文学大系『平安鎌倉私家集』（岩波書店）を本文・歌番号の典拠とされている。
- 7 前掲書註5
- 8 群書類従本の本文を典拠とされている。
- 9 前掲論文註3
- 10 本文・歌番号は、『新編 国歌大観』に拠る。以下、和歌の引用に

ついで同書に拠る。

11 玉葉集「心にも袖にもとまるうつりがを枕にのみやちぎりおくべき恋(1566)」は、建礼門院右京大夫の和歌と認めがたく、検討の余地も少なくないと思われるので、小論においては考察の対象に入れておかなかった。

12 拙稿「風雅和歌集の表現にみる「なにとなく」について」（長野工業高等専門学校校紀要 第二十三号）

13 「ゆうひうつる」・「こずあのいろ」の二句については、久保田淳氏「建礼門院右京大夫集評釈」（『国文学』学燈社 昭和44年3月号）において、「夕日映る」の句は、勅撰集では、他に風雅集に二例（為兼と光明院）、「梢の色」の語は玉葉集に他に二例（為理と後伏見院）が見出される。京極派好みの表現であると知られる。このような所から彼女は玉葉風雅歌風の先駆的存在とも言われる（岩佐美代子氏「玉葉風雅の特異表現」昭和四四・一・一八和歌文学学会例会発表）と指摘されている。

- 14 本文は、糸賀きみ江氏『建礼門院右京大夫集』（『新潮日本古典集成』新潮社）
- 15 久保田淳氏「建礼門院右京大夫集評釈」（『国文学』学燈社 昭和44年3月号）
- 16・17 前掲書註14の頭注
- 18 前掲書註14の解説
- 19 前掲書註5
- 20・21 前掲論文註3
- 22 前掲書註5

(7)

玉葉集，風雅集に入集の建礼門院右京大夫の和歌をめぐって

A study of phrases in *waka* of

*Gyokuyōwakashū* and *Fūgawakashū*

Seizo TOYA

*Gyokuyōwakashū* and *Fūgawakashū* are these anthologies of *waka* being collected by Imperial command.

They are famous as anthologies which characterize the poetical style of *Kyogoku* school. *Kenrei Mon'in' Ukyō no Daibu shū* is a private collection of *waka* poems.

It was edited and completed early in the *Kamakura* era or the late *Heian* era.

This is a study on *waka* poems and *waka* phrases of *Kenrei Mon'in Ukyō no Daibu shū* appeared in *Gyokuyōwakashū* and *Fūgawakashū*.

---

一般科 講師

原稿受付 平成3年8月20日